一、政治の近代化とは何か

先日、私は日本新聞協会に招かれて、偶々北ベトナムから帰国された朝日新聞の論説主幹森恭三氏との対談を行ないました。森さんの御発言は、既に朝日の紙上に掲載されておるレポートをふえんしたものでありますが、私は大変興味深く拝聴いたしました。その要旨を申し上げますと、森さんは、アメリカも、北ベトナムも、それぞれ誤ったフィクションの上にその政策を打立て実行しておるのではないかというのです。

先ずアメリカは、(1)一つの政権の支配は、本来その領域全部に及ぶもので、ベトナムにおいても然りだというフィクションに立脚しておる。ところが、昔からベトナムにおいては政権の支配がその全土に及んだことはない。せいぜい森の入口までしか及んでいなかったのだというのです。(2)またアメリカは北からの共産勢力の浸透があり、これを追払いさえすれば南ベトナムに平和と自由が還ってくるのだというフィクションをもっておる。これも明らかに楽天的にすぎると森さんはいわれるのです。

一方、北ベトナムも(1)かつてのディエンビエンフーにおけるフランスに対する勝利の栄光を忘れていない。(2)また「来たものは必ず帰るものだ」という仏教の教条を信じておるように見える。これとてもアメリカ同様のフィクションに酔っているとしか思えない、というのが森さんの観察であります。だから森さんは、この両当事者がこれらのフィクションを抛げ捨てて、冷厳な現実を正視し、前向きの姿勢にならない限り、事態の解決は難しいと主張されるのであります。

私は、この森さんの報告を聞き、大いに啓発されました。特に森さんのいわれるフィクションというものが、事実と大きい距離をもっていながら、人間の思考と行動をしばる力をもつものであるという認識に異常な興味を覚えたのであります。事実ベトナムでは第二次大戦直後、大量の餓死があったし、ゴ・ジンジェム政権の下においても多数の殺戮が行なわれました。平和といわれた時期においてさえそうでありました。だから考えようによっては、戦時であるといわれる今日よりもより悪い状況にあったともいうことができます。だから、たとえこの戦禍が収まってもベトナムの空が直ちにカラリと晴れるわけのものではなく、依然として灰色の様相を呈するにちがいあるまいと思います。そして、この灰色を脱するには何をおいても、ベトナムの内政的な地盤が固まらなければどうにもなるものでない。森さんの報告はそうした示唆を私共に与えておるものと思います。

今日われわれは変転極まりない新しい時代を経験しております。新しい科学と技術上の発見が社会の全分野にわたりその変革を促しております。いうところの戦争もまた、その例外ではありません。今日の戦争は目に見えない思想戦とか謀略戦とか心理戦とか経済戦とかいうものが本体になってきており、武力戦は単なる補助的な役割しかもたなくなってきております。いわば広い意味の政治戦が、この地球の上で、不断に行なわれておるのであって、われわれはこの政治戦に勝つか少なくとも負けてはならぬという厳しい格律の下にあるわけです。

そのように見てまいりますと、「政治の近代化」という今日私に与えられた設題は、大変悠長な響きをもっておるように思われます。何となれば政治にとっては、そのやり方が古いか新しいかが、実は主たる問題ではなくて、よく国民の信頼に応えて、この政治の戦いに勝ち、その国の平和と安全、秩序と福祉を実現できるかできないかが問題の本体であるからです。従って政治の近代化ということも、実はこの国民的信頼を高めるのに役立つ限りにおいて問題にする値打があるというべきです。

ベトナムの悲劇も、もとはといえばベトナムの内政のもろさがもたらしたもので、アメリカが本当の犯人ではないと思います。日本においてはベトナム問題がやかましく論じられますが、ベトナム問題を解決する実力もない日本が、大きな口をきく資格は実はないのであります。といっ

てこれを面白半分に対岸の火災視することも間違いであります。そうではなく、ベトナムの戦争の根因がその内政の脆弱さにあったことに鑑み、この戦争を他山の石として、日本の内政をいよいよ堅牢なものにする心構えこそが大切であると思います。

そこで日本の政治でありますが、昨年夏以来、黒い霧の問題が、与党のみならず野党の中からも出てきたし、閣僚の非行問題も批判を浴びることとなっております。私はこの状態は、まさに異常乾燥状態であって、いつもであればボヤに終わるであろう事件が、大きい火災を起こしかねないような危険な政治的気候であると判断しております。この異常な状態を鎮静するためには、どうしても政党と政治家が、他を責める前にみずからの姿勢を正し、国民の信頼を取り戻す以外に道はないと思います。政治は国民の信頼と協力がなければ何もできないからです。

ここに与えられた設題、「政治の近代化」も、そのための手段としてはじめて論議に値する課題になります。政府は政治の近代化のために、近く政治資金規正法と公職選挙法の一部改正案を国会に上程しようとしております。この改正案はいわゆる政治資金の拠出者にその拠出総額の最高限度を設定すると共に、その支出を公明にし、併せて連座制の強化をねらったものであります。

ところが本案の審議を巡って、自民党内は、いわゆる両輪論（選挙区制と政治資金の同時規正の必要）、違憲論（国民の自由な拠出を法律で規制することの非）、不均衡論（労組や宗教団体がその費用で行なう政治運動を手放しにしておる状況においては自民党側だけに酷）、更には警察

国家の弊害論までが飛び出してくる始末で、ところどころ可能な修正を加えて一応の政府原案をつくり上げたものの、国会に上程されてもその成否が危ぶまれる状況にあります。

私は、これらの反対論に一応のいい分を認めるものでありますが、これらの反対論の多くは事の本末をあやまっておるばかりでなく問題を一般化しすぎる怨みがあると思います。つまりその多くの問題点、即ち不均衡論や警察国家論等で心配されておるような問題点は、既に現行の政治資金規正法の成立によって一応踏み切られておる筈であり、強いていえば拠出総額の規正だけが今回の新たな改正点であるからです。尚それよりも、この政治資金規正法の改正は、昨年夏以来の〝黒い霧〟問題に発した政治不信を取除かんとする世論の結晶であります。今日これをあいまいな姿にすることは、世論に逆行するのみならず、一層政治不信に拍車をかけることになる虞れがあるからです。私は、この際、多少の不自由を忍んでも選挙制度審議会の答申を尊重した形で、この改正法案を速かに成立せしめ、実施に移すべきであると信じます。

政治は政治家の専売特許ではありません。全国民が、政治家も含めて、それぞれの立場においてそれぞれ得意とする楽器を手にして参加するコーラスのようなものであると思います。このコーラスに参加しようという気持ちを国民にもってもらうことが、その勧進元である政治家の任務であります。そのためには先ず何を措いても、みずからの姿勢を正し、みずから汗をかいて苦吟

するところがなければならないと存じます。政党も政治家も、権力をかさにきるところなく、国民と同じ平面にある謙虚さをもたなければなりません。政党の財政、組織、人事、広報、党規等一切の活動がそういう自覚をもって行なわれる場合に、初めてここにいう政治の近代化が実ってまいるものであります。

といって今日までの日本の政治が、すべての点において悪であったと申し上げるものではありません。今日までの日本の政治は、それなりに立派に役割を果たしてきたと思います。廃墟から立上がって今日の復興を見、国民の生活を向上充実せしめつつ、世界に向って大きく進出してきたことは、国民に潜在する能力を政治が有効に組織し動員できたからであります。とりわけ世界の各地に起こった動乱を他処に、日本の安全と平和を守ることに成功したことは日本の政治の大きいメリットであったと信じます。

しかし今日、この日本の政治が国民の不信を招きかけておることもまた事実であります。私共はこの際、もう一度政党と政治家の本務に立還って、深い反省と強い勇気を以て進まなければいけないと思います。日本と日本人のもつ潜在能力は無限であります。日本の前途は洋々としております。これだけの力を国民的なコーラスの姿により大きく再組織するため、皆様も私も自信と希望を新たにして大いに頑張ろうではありませんか。

（昭、四二・六・四　日本青年会議所関西支部講演）